

# 次世代型海藻養殖による豊かな伊勢湾再生事業-Ⅱ

## 黒ノリ養殖支援

岩出将英・舘 洋

### 目的

本県の黒ノリ養殖業では、生産者に対して養殖環境についての情報提供や病害等の対策を指導するなど、きめ細かな対応が求められている。

本事業では、漁期中にノリ漁場栄養塩調査およびプランクトン調査を実施し、その結果を迅速に生産者へ発信するとともに、その後の対応策等についての情報を提供することで黒ノリ養殖生産の安定化を図ることを目的とした。

### 方法

#### 1 今漁期の気象の特徴について

気温、降水量は、津地方気象台が発表した津市のデータを用いた。

#### 2 今漁期の海況の特徴について

水温は鈴鹿市白子港(午前10時)の定時観測データ、栄養塩および植物プランクトン発生量は三重県ノリ漁場栄養塩調査のデータを用いた。

#### 3 共販結果について

三重県漁業協同組合連合会発表の令和3年度共販結果データを用いた。

#### 4 ノリ芽検診・病害診断等の養殖指導

漁期中において生産者から送付、持ち込みされたノリ網や葉状体サンプルについて病害診断等の養殖管理にかかる指導支援を実施した。

### 結果

#### 1 今漁期の気象の特徴

図1に今漁期(令和元年9月から翌年3月)と平年(平成3年から令和2年)の気象(気温・降水量)の推移を示した。気温は、10月上旬に一時的に高くなったものの、12月下旬まで平年並み、1月以降は平年よりやや低めで推移した。降水量は、9月に台風14号の通過により平年より多めとなったが、10月以降は12月上旬を除いて平年より少なかった。特に1月以降は顕著な少雨となった。

#### 2 今漁期の海況の特徴について

図2に水温及びの桑名漁場を除く漁場の平均DINと珪藻プランクトン発生最大密度の推移を示した。水温は、10月上旬と12月上旬は平年より高めで推移し、1月以降は平年より概ね低めで推移した。DINは10月下旬を除き、漁期を通じて色落ち発生の指標となる100 $\mu$ g/L以下で推移した。11月下旬から *Skeletonema* 属を優占種とした小型珪藻プランクトンが比較的高い密度(最大9,670cells/mL)で発生したためDINが減少した。12月上旬にまとまった降雨があったため、DINの一時的な回復がみられたものの、1月中旬以降は大型珪藻プランクトン *Rhizosolenia* 属が長期的に発生し、顕著な少雨の影響もあり、漁期終盤にかけて広範囲の漁場で重度の色落ちが発生した。

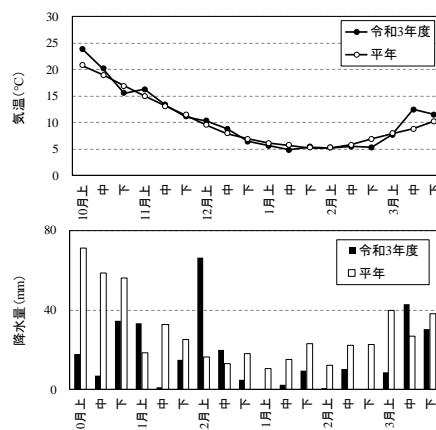


図1. 今漁期の気象動向(上: 気温, 下: 降水量)

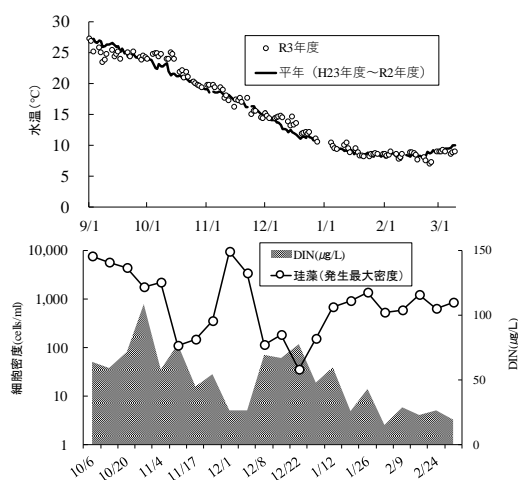


図2. 今漁期の海況(上: 水温の推移, 下: DIN量と珪藻プランクトン発生量の推移)

### 3 共販結果

令和3年度漁期の共販は、全9回（臨時共販は含まない）開催され、生産枚数8,800万枚（前年度比62%）、生産金額9億3,900万円（前年度比70%）であった。平均単価（枚）は、10.7円（前年度比113%）であった。

共販汐回別の生産枚数と平均単価について図3に示した。単価は、前年度漁期並みで推移した。2月上旬ごろから桑名漁場を除く広範囲の漁場で重度の色落ちが発生し、なかには生産不能に陥った地区もあったことから、5回汐以降では品質低下、生産枚数の減少がみられた。

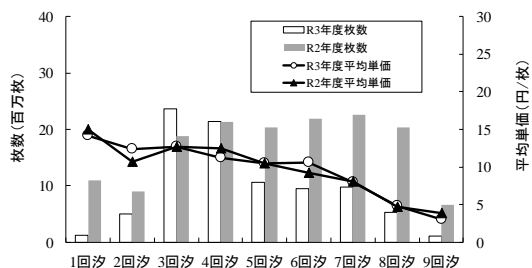


図3. 汐回別生産枚数と単価の推移

### 4 ノリ芽検診・病害診断等の養殖指導

漁期中に県内漁場の栄養塩動向調査およびプランクトン発生調査を合計20回実施し、生産者および関係部署あて情報提供を行った。また、生産者の要望により随時ノリ芽検診および病害診断を実施し養殖管理にかかる指導支援を実施した。ノリ病害については、漁期終盤に一部の漁場であかぐされ病が散見された程度であり、大きな被害の発生はなかった。一部の漁場では、生産に影響を及ぼす規模の食害被害の実態が明らかとなってきており、食害軽減対策にかかる技術開発が望まれる。